



改正 月令 博物 筌冬之部

十月部目錄

△印、俳借の季をり、物あり

養生の法。兩風の考。米の豊。妙藥其外人家重宝の事ハ取々ある史目錄ニハあるなり

發端

冬之由來

冬之異俗

十月

卦 陰陽生 異俗

十月 十月

立冬節

十月 十月

十日

此部ハ十月日ノ定アコトノ事支ノ定アコトノ事ト驚メタル也

金盞の旬

十月 十月

衣服の式

十月 十月

進炉炭

十月 十月

炉開

十月 十月

御玄猪

十月 十月

達磨忌

十月 十月

十夜

十月 十月

十月

十月



日十	讚皇羅祭	日十	南維磨會
日二十	芭蕉忌	日三十	御命構
日三十	水官解厄	日五十	下元
亥中	出雲大社神事	亥中	神あり
日六	都聖國師忌	日廿	魚比須講
日五	京法勝寺大衆會	日八	梅屋虫供養
日	神迎	日	神迎
十月	此部は八日の定あつる十月	十月	此部は八日の定あつる十月
御取越	茶の言切	御取越	茶の言切
巨燧明	巨燧切	巨燧明	巨燧切
月時令	此部は十月の時候あつる	月時令	此部は十月の時候あつる
初冬	初霜	初冬	初霜
時雨	初霜時雨	時雨	初霜時雨
片雨	涙	片雨	涙
松風	落葉	松風	落葉

老酒	木枯
初雪	初氷
冬ざれ	冬籠
冬構	閉北窓
草木	此部は十月の草木と集め
名州枯	名州枯
冬椿	早咲椿
残菊	冬牡丹
天竺花	冬菊
水仙花	八手花
茶の花	山茶花
歸花	寒梅
枇杷花	室の梅
榎の花	散紅葉

△麥蒔

△枯蘆

△

△枯柳

△落葉

△

△禾の葉

△木葉の雨

△

△朽葉

△蕪

△

△大根

△冬木の櫻

△

△雪の下

△松の花

△

△生類

爰より十月の鳥けだりの魚類のふみあつちあるは

△鶯子啼

△

△必用

此部より十月一ヶ月の天氣乃見申す其外必用の報とのと

△破軍向方

△日刻

△

△出行作事

△樂事

△

△天氣

△占候

△

△養生

△衣服式

△

△生花式

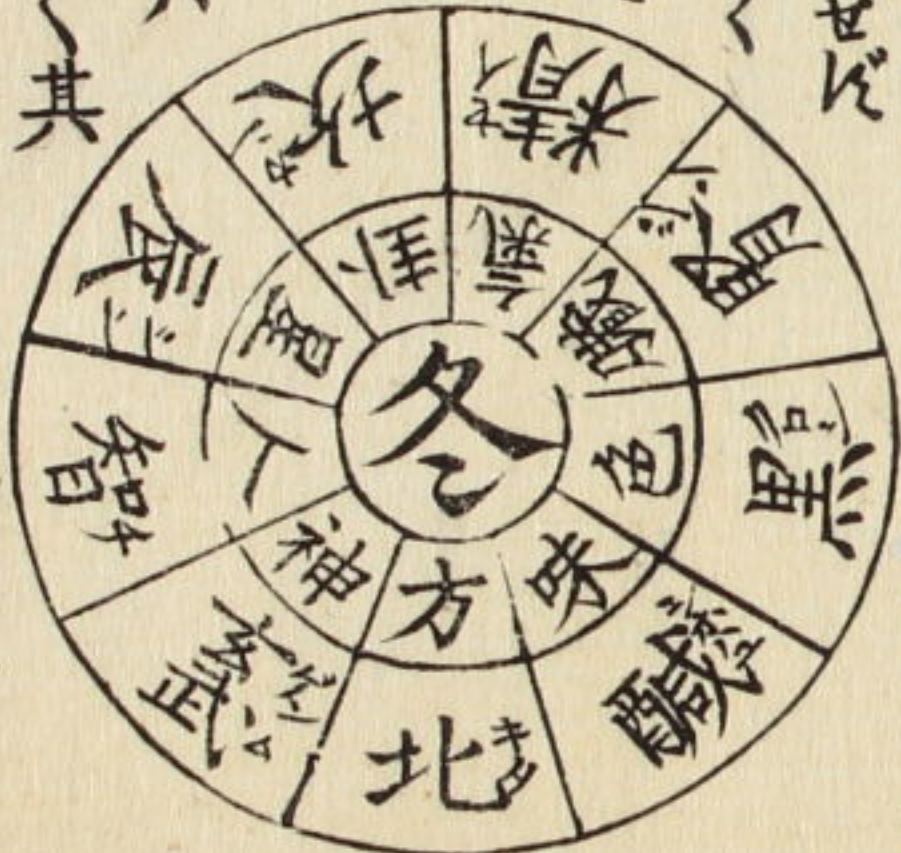
△料理献立

△

十月部目錄終

月令博物笈冬の部發端

九き内か書くる冬の氣の旺る所月令曰天氣上騰と地氣下り降る天地通せん閑塞しと



冬とあるといふ註ふ天氣上り騰と地氣下り降るハ天地のく其位を正しとるをいふ猶委しきとけの爲主といふ所よりん

冬泉 釋名小曰冬終之萬物終成る所以と有これ

冬一年の終りてよろびの物成就するといふ事との和語曰冬をふいと訓せしハひゆといふ事とふといと五音相通なるなり

冬爲王 方北といふ易の統圖曰日冬北方の黒道を行

これを北陸と云ふと有るなり。北を
冬の方と云ふ。味ハ鹹と云ふ。さ
ぐる事ハ冬の氣ハ水ハ鹹と云ふ。色を
海水の塩と云ふ。味とする。色を
黒し。ハ月令ハ天子玄堂の左介
居り玄路のり鐵驪を駕し
玄旂と載黒衣をきると有る
玄堂ハ北の方の堂と云ふ。玄路ハ
黒き車鐵驪ハ云々。事云々。事云々
旂ハ云々。事云々。事云々。事云々
黒色と主とする。臓ハ腎
とハ人の五臓の内にて腎ハ水を主
たる臓と云ふ。冬ハ配當と云ふ
氣ハ精とハ腎精と云ふ。卦ハ坎
とハ坎ハ水の象と云ふ。星ハ辰
とハ辰星北にあつたり。人ハ智
とハ腎ハ聞。歳の宜て人の智
恵と云ふ。事云々。事云々。事云々
常と云ふ。神ハ玄武と云ふ。黒
き物と云ふ。以て冬の神と云ふ。

冬異名
玄英。顛頊。玄冥。上天。
清冬。三冬。九冬。

異名註
爾雅の註曰氣黒く
して清英と云ふ。顛頊と云ふ。

禮記ハ其帝ハ顛頊と有。玄冥ハ
これハ禮記ハ其神ハ玄冥と有。
上天ハ禮記ハ天氣上騰と云ふ
有と云ふ。三冬ハ東方朔の疏ハ出
づる字にて冬三月の事を云ふ。
九冬ハ元帝纂要ハ冬と云ふ。九冬
と云ふ。清冬ハ皮日休ハ詩ハ冬を
清冬と云ふ。事云々。事云々。事云々
御鈔ハ出でて雪氷と云ふ。露のこ
ろと云ふ。事云々。事云々。事云々
拾遺集ハ出でて三冬と云ふ。事云々
きぬれと云ふ。漢土ハ三冬
と云ふ。同じ。

哥秘蔵 さまつけ 小野峯雄
きらつけとなむる末ハ八重玉履
立田れ山とまもめちかくに
夫木 為相

波中もき入江の南まきうく
船日れそらぎ冬のかげなき
能言言をかしむ際後しをがき支考

ゆたけ 冬の朝の事く
哥蔵玉集

ゆたけ 冬をまの神々喜の
神を佐保姫とつ

らんのえめ 夏の神とつと娘とつ秋を鈴田娘
とりいづも童蒙抄子出る春

秋ハ傲の季に用ゆる也も亦に妻
しく註は統まする神祇おらば翠

の氣をまる造化の神とて候ふ存する
右の外三をふらるる季節れ

りの別ニ三冬の部有

十月の部 △印と記は分
季とあ物



調子ハ律子として應鐘とつハ水
の成長しるへト禮記月令ニ出應

陽ハ應どるなり鐘ハ動く
心よて萬物動ききうらるる

卦ハ地坤とハ上の圖れど極
陰よて地のうらるる

十月異名 △陽月 △良月 △孟冬
△上冬 △開冬 △玄冬

秦正 小春 △初冬
初冬月 △小六月 △こま月

初冬月 △小六月 △こま月

異名註。陽月とハ此月一陽也

雅は出たり。良月ハ左傳は出

たり十は數の満る事を良と

いふより左傳の注は見えたり

孟冬ハ月令は出はしめの冬と

りハ義也。上冬ハ纂要は出これ

もはしめの冬とハ事也。開冬

ハ顔延之の詩は作まり冬

の事也。玄冬ハ纂要

は出てはしめ此冬也。秦正ハ歲

時記出秦の世の正月ハあり月

といふ心也。小春ハ事文類聚ハ十月

ハ十月にして春のときといふあり

上無といふハ陰陽の數より下り全

てあり十より上の數はしつて此月ハ

といふ。神無月といふハ此月神ハ出雲國

集るハ故名つて出雲ハ神有月と

いふ又一説は此月の異名上無といふ

より俗誤つて神無月といふも

又真淵の説ハ此月雷聲と出

たり此月伊弉册尊崩しり月

ゆハ名つくと世間問答は出り

貝原氏の説ハ八卦ハ乾ハ坤

として純陰ハありハ陽未復陽

なきの月ハ神ハ陽の司也此月陽

なきの月也神無月といふ諸神出

雲ハありまらりといふこと

跡ハありなき事とあり其外

説多し委しく日本歲時記に

あるは然とも風雅の道ハ此論ハ

不拘神なき心とよむが風情あり

てより次ハ證哥と出し作例と次

哥 秘藏 神無月 菅原忠音

下とやまハこれなりなりなり
エがれひまなき神あり月
莫傳 神無月
玉雲ありハ松の毛をこれありあり
神無月と何といふ

千載 十月 道因法市

阿し吹ひくはらぬの祿とに
あられ対する十月月う那

新亥 十月 高光

十月月風は紅雲のらる耐ハ
そこはくなく物なるき

非神 十月 野水

十月ハ小俗の不世見ハふろ支考
十月月髪を人むさむりの園十
頃るんやたふまはれ十月支考

哥 藏王 十月

らりそりこの後のしづれ月
冬れそしめよ何とあまじ

同 十月

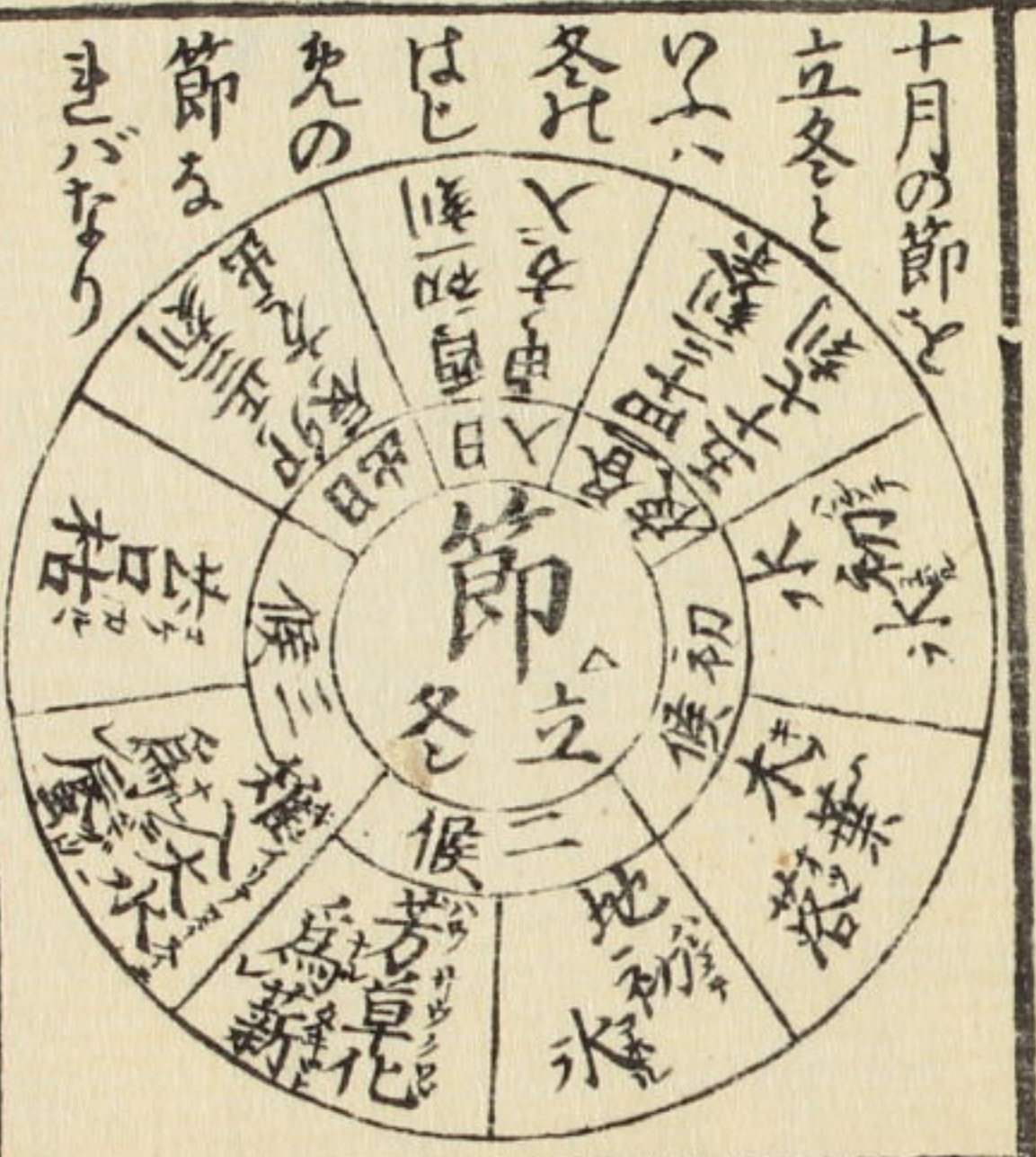
るも本と初月のおぼけ
なぐちも白きけさのそり

非 鶴の尾さすまふ 后女

度ぐのもぬもふまふ人男

立冬 節の名。七十二候。草木七十一候

昼夜長短。日の出入左に記



十月の節と立冬

此頃水始て氷。木の葉落散

つとと。地始て氷とハはと免に

水が氷つてそれよりだんく地も

いてるし。事。芳州為薪とハ

よきふらひの有し。秋草もく

ぬれしむらさき。雉入大水為蜃

月令の注は。蜃ハ蛟のこひこれ

とひ心こも。苔枯ハ草木はう

よわらば苔まで枯るとし。事

哥 千載 十月の事どもとハ

かれぬゆよりあまきぬらん

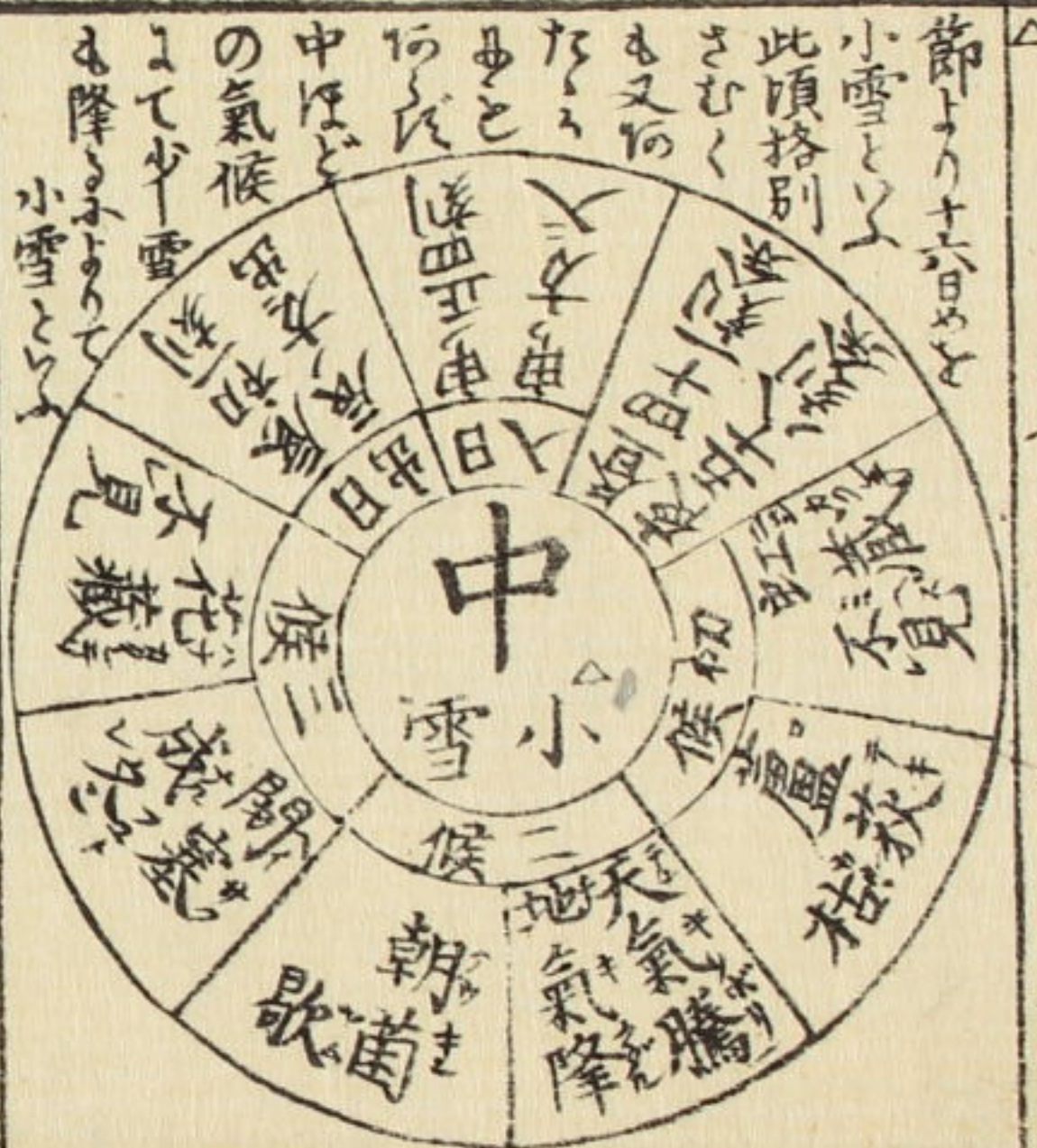
節の占候

立冬の日壬子あつて来
年麦貴し田耕宜し

壬子なれば来年大熱し節の日晴れ
来春雨多し北風あれば六畜ふさふさなり

小雪

中の各七十二候。草木七十二候
日出入。昼夜長短。左に記す



○虹藏不見、此頃より来三月まで
虹あつてもまきをり。昔秋枯あしれき
枯る。天氣騰地氣降とハ天の陽
氣去りて地の陰氣下る也寒氣
せんぐくたりもよとく。朝菌歌と
とらびらせざる。閑塞成冬と

陽氣きざりて寒き冬とわらう
なり。花藏不見ハ花ハ大抵陽氣
を得てひるくくのもや陽氣なき
時なればそれて不見なり

日令

此部ハ日の定まる事
并に支の定まる事と出

朔

人日沐浴とし長壽よまる
今日房事と断ふつしびし

朔

孟夏の旬 今日天子御装束と
改めりて南殿お出

御なりて節會行つて二献の後
氷魚と群臣より奉事根元出

哥

元弘立后屏風
活れる竹代の真くよらひまを
大官人よりくまなり

非

幼穉兵まはる色袖の波 也有

朔

更衣 十月朔日先づ御衣之なり
掃部寮夏の御装束と

撤して冬の子改めりて天皇南殿
お出御ありて節會行つて是を孟

冬の旬より。衣更らばくらの六季四月之
排あかき袖と成けり更衣 李下

朔 衣服式 諸家入會より來年三月晦日
迄各此袍を着せしむる事

朔 拜墳 唐土より今日貴賤ともに先
祖の墳を拜し祭より貞原

説より本朝よても今日先祖と祭るべしと
いつり唐日本の祭より委しく 歲時記出

朔 進爐炭 唐より今日有司爐子燒炭
と奉りて事支類聚より出

朔 雜燔食 喫入十月朔日多
裏と作て節物より荆

楚の人多く燂燔と食ひ或ハ糖と為
そ事支類聚より出燂燔といつハ酒の淨の

こがたるやる物又燂燔の事と支類
そつハ蒸裏といつてつりる物といふ

朔 爐開 燂燔會ハ爐開會今日
炉と開き三月廿日炉とふ

唐より今日炉と開き炉中にて肉といふ
了飯食は是とたんろ會といふ 歲時雜記出

此例より本朝茶人此日より炉と開
き賓客と茶と喫ハ詩有 歲時記出

神送 神の旅ハ神の留守此日諸
神出雲の大社ハ臨幸し

といり委しく日本歲時記に
出たり面白き事といふべし

非 節 節の神ハ神の不在野水
かつきこの神ハ後深き流出ハ蘇守

狂 馬がくで風と神のかしま立
本の葉さつく背そいて行 真魚

亥 御女猪 亥猪餅 御嚴重
亥の子ハ能勢餅

昔ハ山猪を奉る事 日本記等出
○應神天皇の御代より毎歲

亥の月亥の日を祝ひし御
亥猪の餅を奉るべき詔ありて

攝州能勢郡木代村切畑村西
村より貢とんハ餅を割取らる

當家ハ能く清め赤小豆と餅
米とよて餅とんきくの花かえて

赤いの花葉とわいりきくん色
 うす赤しこれ八家の子れ肉状
 表しころ下學集より白豚ハ毎
 年十二子を生む閏年ハ十三子を
 生む故は婦人これと視ふとつり
 されば童識ふ支れ子ありら親うめ
 子うめとり六此故あらう十月亥の
 日ふ餅をくハ無病長生あり朝野
 其外委しく八歳時記拾遺ふ出り
 女の祝すけを甚面白し見るべし
 哥蜻蛉日記万代といふ山遠の
 いのこより君さううういふる
 非 秋の菊もふつくまは藤立南
 今おあけ火燈の上のらおは時風
 狂 降答とてあうよづれふきりし
 さてもいこの腹れえこく 貞松
 上 今日槐の実を食 四不成 今日房華
 巳 せん百病と去る 日就日と慎べし
 五 達磨忌 達磨南天竺の人の蘆の
 日 葉ふ葉てりるじり

禪宗を弘む大和十九年十月五日
 寂は委しくハ博物筌ふ出たり

非 禪宗小達を忘るぬ僧者寛人
 蓮 蓮を忘るるもふあて中道李破
 狂 小雀をのびふうけくるゆめ
 くらわらしてさむき寺うな 貞柳

残菊宴 延喜の御代十月残菊
 の宴とりよはしたまう

哥 秋さけも菊よはあれと秋を月
 附ぬは花のころはうあける 貫之

連 秋の菊も菊の菊の菊の菊
 非 吾んで無くするよは菊の菊の菊

狂 秋をよみゆとつるやうとつくと
 むらうしそうに残菊の宴 秀貞

十夜 此月五日より十五日まで淨土宗
 の諸寺にて會式を勤むる

非 は豆袋の香こもさるる十夜は白羽
 いろさぬふ吉田の吉田十夜も多里

狂 くらんとくたけと食みき
 百万遍の政のほなきの 松子

六 大興福寺法華會 一名山階寺 といふ九月

晦日より十月六日まで妙法の大會
とむらうしむ此大會八關院冬嗣公

初めより六日冬嗣公父長門大臣此
御忌日ふあつる也其為行つるも

十 讚金毘羅祭 讚州鶴尾郡
日州 象頭山ふ神代

より御鎮座あり神々御神事八月
晦日より初より十月十日終之今日參詣

別して多し故に季々々々。金毘羅
道中記といふ本あり此本ハ金毘羅

參詣海陸の道中と委しく記は茶
御利生縁記哥等まで委しくの凡

十 南都興福寺 南都興福寺
日都維摩會 といふ土官道行

哥 白川殿七百首 新大納言顯輔
秋玉月内ふふうおけるは法とて

ちう此部にのころそ乃そそ
非 維摩をいぬりの杖のじし尾霜

十 成芭蕉忌 俗姓松尾氏初の名
日啓 半七後不忠左衛門

宗房と改俳諧を李吟や學ひ桃青
といふ江戸深川の庵に芭蕉一株を植

てし是ふよつて世の人芭蕉の翁
とより尤俳諧中興の祖なり

三 御命講 法花會式といふ
日蓮上人今日寂以故

法花宗寺院におたぐ御影供を
修むるをみえくまかると云俗に御

の字をとてあめつとひるくたう
非 頭もも花の名をく金武な雨方

十 下元 今日と下元といふは正月
十五日中元の取やうといふ

五 水官解厄 今日水官人間降ての
善悪をまは天帝を奉

中 出雲大社神事 神あつめ神あり
出雲國杵築村に

何れ祭神大己貴尊之祭の當日
以前より毎年風烈く波あつき日

其日龍蛇藻葉乗て海上を浮む
を取て曲物も盛了神殿も納む
いり其蛇鱗蛇も似て鏡形の變
あり尾先ハ魚も似るまゝなし

十都聖三國師忌 東京福寺院關山之
建仁二年十月
十五日生も弘安三年今日寂也

非通天の條と或や用山忌之白
此日雞初くなく時湯あり
とれハ長寿無病なり

廿不成 今日遠方へゆく事と思ひ
日就日 天龍寺佛國國師の忌日

廿惠比須講 誓文拂・此日商家
一統あり日として我
と學り酒宴を催して客をもまほく
中より呉服店ハ格別なきハハハハ

事ハ商人つねく敷賣の罪を拂ふ
とて誓文拂もものハ京まで官者社
は請て是と誓文かしの社より大坂
あり公官の戒ハ衆諸多し

廿五日 南禪寺の一山忌 行狀博物卷に
京法勝寺大衆會。應仁の頃寺絶
たり今本尊藥師佛東坂下西教寺あり

廿五日 今日人の病とく事なりこれ
干月の廿日もちとを怪女なるハ桃

廿八不成 梅尾虫供養 梅尾寺明惠
上人の開基

晦神迎 非は遠かまはれりとも林達朝堂
阿等の手掛あり林達暮西

月令 日ふくまらば十月一ヶ月の
雜事をしす

御取越 十月廿八日親鸞上人御忌日也
正當日ハ本願寺にて報恩
講を修り一向宗の檀家ハ報恩講
と勤むるハ當月取越て勤む故名づく

茶の場 山口切 三月ハ茶を搦五六
上しハ九月は渚国へ出ハ十月ハハ
茶人茶壺の口を開く故口切といふ

十月廿八日親鸞上人御忌日也
正當日ハ本願寺にて報恩
講を修り一向宗の檀家ハ報恩講
と勤むるハ當月取越て勤む故名づく

山口切 三月ハ茶を搦五六
上しハ九月は渚国へ出ハ十月ハハ
茶人茶壺の口を開く故口切といふ

茶の場 山口切 三月ハ茶を搦五六
上しハ九月は渚国へ出ハ十月ハハ
茶人茶壺の口を開く故口切といふ

上しハ九月は渚国へ出ハ十月ハハ
茶人茶壺の口を開く故口切といふ

茶人茶壺の口を開く故口切といふ

茶人茶壺の口を開く故口切といふ

茶人茶壺の口を開く故口切といふ

①口切の場の庭ぞまのりき芭蕉
口切や袴のひふ線芭蕉其角
②口切の事をちあつぎて後むし
むしくのもはしちやくむちや 芳室

巨燧明 △巨燧切る。巨燧はばうり
いハ三冬よりの事なり

時令 此部は十月の時候に
かゝる事をおのむ

初冬 十月三日までをとり又十月
の異名をもとち十月朔
一日此事をとりしなり

③夫木 隆源

類題 初を敷 範宗

家集 山家秘俊光

初冬 初冬はしききりもまをかれぬ。をれ
初冬。何もしききり。をその来て
きのはまき風。水。こほりて
をどむらる。今冬よりふゆと
まのふを林と。くふとふゆとや
まゆもまるとる。あゝちるれぬ

初霜 △初霜きゆる。おののこけ
委一く冬の土と記れ

④冬 冬をきてを結びもあぬ初霜の
とてれいあん風をよぐ 家衡

⑤初 初霜のきゆるも。重はる宗祇
初霜や取ふ綱の五つり支考

⑥初 初霜のきゆるも。朝食の
著とちく回の後中をひけり立甫

時雨 △初雨。志だれの初雪季に
なるより次の秋句の初雨

初雨 初雨と八十月ふりしけり
初雨と八十月ふりしけり

ふる波りよ秋の末よふの秋の
ふれとりそ初ふれといはず。
霖雨と云ふ小雨のまにてもあてし
ふれよをあててし

拾遺 雨さしし雨あをまあつ
かりいよをれかあひの森 貫之

千載 宿あし七夜まさんこのあつ
木のまにうらな秋まは雨と 馬内侍

夫木 神を月時さあさるまよ
かしくそ夕ふれのそら 宗尊

碧玉 夜時雨

雨あをた雲はまよまてんーや
附あを夜の枕とあらん

雪玉 山時雨

みま山あしもそりもを終へく
附あつきくは方けうきま

同 霽中時雨

移も志れてゆこそまのうらを
ふむ移のまうらつてやん

柏玉 河時雨

ふれくをる附あ平剛せはは川
かきもやまは村ーふれうあ

同 野時雨

ふれく移く地をけきは村ーは
杉ま春うて春はらめーは

古今 袖時雨

神を月附あふぬくをみらまよ
そくまい人のたれくまきり

玉葉 松風時雨

ふるれー山の木のまふあうて
附あをのこまよのまの風

同 泪時雨

ふれみらまを秋のくくまうあて
ーふれとふのハ泪たらまらり

詞 △川まの時雨 袖時雨

かきまの地ふ 小夜附雨 夜のふれ

△村附雨 小夜附雨 小のあう

△行附雨 一方まて三方 泪附雨

△後雨 風のあきよこ △夕雨

夕雨 △松風雨 松風とこれの音

△落葉雨 おもしく葉の落ちる音

△志保記 三冬に雪志保記の條あり

△連 雨も雪もあらしのれん 宗朝

△非 河も此雨くたり 雨用舟支考

初 雨 後も小葉と降りげし 芭蕉

△志保記 雨ぬふ風の交もさるる

△非 志く小傘持てはまはらな 闇指

△木枯 雨と去。木枯しの風は清く

△非 木枯のあけ竹女ふゆふ 芭蕉

△哥 千載のふたばり さまはる木枯ふ

△非 雪のまじり風ひくもき 定頼女

△液雨 唐閩中の俗立冬の後十日

と入液と雨とをいふはる

初雪 △初雪きまる △初雪の賦 泰

△非 初雪は降りしと見る 見泰とつて

△浅雪 脚ふ世外雪のまじり 哥も出ぬ

△哥 拾遺 且景時

△非 山ふりやまぬらん

新古今 瞻西上人

△非 初雪はまきり 其角

△連 初雪はるのちりもはし 宗祇

△非 初雪はまきり 其角

△連 初雪はるのちりもはし 宗祇

△非 初雪はまきり 其角

△連 初雪はるのちりもはし 宗祇

△非 初雪はまきり 其角

△連 初雪はるのちりもはし 宗祇

△非 初雪はまきり 其角

△連 初雪はるのちりもはし 宗祇

△非 初雪はまきり 其角

△連 初雪はるのちりもはし 宗祇

△非 初雪はまきり 其角

晩天 ハシテニ タメノハヤシニタメノ木カハタカト
オモフホドオモヒガケナウキラノ

スレバキウニ西風ニツレテハツ
ユキガフツテキタノシヤ

柳絮三冬先北地 ハナハチ ヤナキノワタカ冬
ノウチカラキタガ

梅花一夜遍南枝 アヒキ ムノノハナ
カヒトヨキ

ノメニミナミノエダニサキソウタカト
オモハハツユキガハツタノデアツタ

初氷 ハツヒ △初氷解。水のかけまじく
冬十三日ヨシヨク

千載のよき秋なれし川乃
まにいとぬの水は薄氷のうん 公實

俳 竹の一夜とありや初氷 里隠
初氷と初氷のまじりて乃 凡 韓悪

狂 心の神を度ふとみちの二三枝
むまじりてあまのむもかきく 貞史

冬ざれ ふゆ 冬ざれは冬しあはれどいふふ
冬は物さびたあらにあら

冬籠 ふゆ 冬は竹木も花も落て精気
地中にさるるををさるりといふ

又一説よ冬ふなれば家の内ふこりり
なることともりて季ハ三冬ふしてはし

哥 雪ふれば雪ふりりせる竹も木も
まよふまよふれぬ花も咲ぬ 貫之

△冬もまよふまよふに推して
庭のうきまよふをさるりといふ 世不徳院
御製

俳 金屏の松の古びやまよふ 芭蕉
山嵐山嵐に方よをさるりといふ 支考

吟 ながま仙人もまよふこりり 野水
雪は落いててある木の芽も 鶴十

西鶴 馬行
西鶴 長原阿久人ともり 西鶴

冬構 ふゆ 冬うまハ冬よなりてまよ
とより炉をいりくやうなる

俳 冬として寒をふせぐ支度をする心
冬を構ふるも梅のやまよハ 白扇

閑北窓 ひまわり 北風はてけしきりのゆ
北風をよけし支度

草木 くさき 此部十月の草木を集む
印する冬三月の景物も用ひては

此部十月の草木を集む
印する冬三月の景物も用ひては

此部十月の草木を集む
印する冬三月の景物も用ひては

此部十月の草木を集む
印する冬三月の景物も用ひては

名草枯 △葛うら △菊うら △薄うら

御傘 △花の字結ハ秋ことなり

俳 △女に字料もつ時もあり 鬼貫

冬椿 △早咲椿椿の花ハ春冬鹿 者ハ早開と名て人賞之といフ

殘菊 △九月咲のころうら菊ころり 貫之

狂 △一とせの花のかぎりを跡まれば 子代のねんどゆりまきよ 舊徳

細葉 △月輕羽率團花飛碎黃

還將 △今歳色復結後年芳

細 △カキ葉カミホミナカラ青キイロアリハナ、ニルク咲タルモミダレ飛テ黄色ニニユルナリ

コトシ △ハコレカナゴリナレトモ又来年コノイロカヲモツテサケヨト心ニチギル

詩 殘菊五字對句 同上

關珊陶令宅 晚彫霜凜冽

寂莫費公房 曉逐露離披

冬牡丹 △寒牡丹○十月ころ花さく 十二月までもあり 大和本州より出たり

哥 雪中牡丹 元政

狂 △さむさむなる形ハ不似く白き牡丹 花の風氣と似たりと云

非 △重ぬ美也ても寧々花牡丹一菊

犬莖花 △石路も書く 非 ちり穴小 香の愛さる大莖の花右山

狂 △口なしのまじりしをいろうして 花ハの花とハりてやみん 為貞

冬菊 △寒菊○多く花ハ重く葉 たりて赤を賞ハ 雪見州

秋無艸上霜見艸博のこり州藻

初見艸藏王は出まらぬも初見艸前多し寒州の事

哥 夫木 式子内親王

白きうらたてんゆりしる雪

蔵玉 初見艸

志づれふる雪ふくししも初見も
花咲ふたりを命をさうらん

連 雪をきくぬ菊さく谷の菊なる宗碩

非 雪にむき美窓の上ふ菊の杖嵐雪

後殿のつよみすのやその菊 梅翁

狂 うちてははれまのさへさくてふる

詩 寒菊七字對句 詩礎 嘉友

顔色却因風露染 愁雪葉

英華不畏雪霜欺 傲霜枝

水仙花 物花白く花心黄く

水仙ふあの日床し蔭子紙支考

狂 竹えの云月心かくわむ免つゆ

詩 水仙七字對句 詩礎

臺蓋元非千葉種 付雲來

羊容要是小蓮花 不染埃

八手の花 葉の岐七八あり形紅葉の

花白く小くくして黒實のさけり

非 つくさふふのたや水まふり 荷風

妙 おろりとふく入此木の葉よ六

藥字の名號をうきつゆのぶとく

せんじく数杯飲ひまむらうくし

てまどくく吐し忽ちおろりおつる

多く吞むと毒あり。実を食ふと毒あり。

茶の花 白花之類 葉の硬くも舌の毒ありし。支考

花の香ハまよふと云ふ。山吹の如く。花の香ハまよふと云ふ。山吹の如く。

山茶花 南方草木状曰山茶花数種あり。寶珠茶

石榴茶。海榴茶。花の中。躑躅茶。茉莉茶。宮粉茶。串珠茶。皆粉紅色とあり。葉ハ各同じうらげと云ふ。是ふよみく

見をば今茶人多くの賞に數種のつむきた。ふし。李寄ふあ。春の却れつむきといふ。海石榴の椿の字小充るハ誤なり。

山菜花 山菜花や吹となく竹尾鬼貫山菜花も花白くいふ。秋人其角

狂つむきもあはる。信面

信面

信面

歸花 梅花といふ。一。二。三。梅

櫻。山吹やどのるい此月二三。さく事あり。多きときとあり。尋常の花とハかじけく賞むるに及らん。

俳 幽霊もまきく。い。田井

歸花 履中。天皇三年

雅櫻宮 冬十一月。天皇池

中 舟と云ふ。白王。祀と云ふ。遊宴。膳臣酒と献る時。櫻

花 杯中に落けり。天皇これをあやしむ。是花時。あはる

物 部長。真騰連。勅ありて。其花の来る取と求めし。え。は

室 山。得たり。天皇其あつしきをよる。び。い。て。即宮の名と。雅櫻と名付たり。是。二。花。之。日本紀。出たり

寒梅 十月の季に入らる俳書も有
十月にもは委しく十月の韻

枇杷の花 白き花よて八月より咲
臘月までもある花の葉は四季とも
小散りす実五月より花の頃より

実の熟するまでの間九月より
さる故自然とよく熟して味いよし

非 脱肛の厨は枇杷の花見ると鬼貫
ふるまればたれも痛せし枇杷は紹藤

狂 二月のすにいとをむとむびこの
ぼろろくと落るまがしし 遊野

室の梅 室咲室の温氣をう
△室をとおて面をうり花のよ李四

室の子れ子の紅や室の梅林兩
榎の花 木と榎とを蚊やり

ゆさるる物はいぬややを食ふ
べくは小木よてよく実を結ぶ

散紅葉 △紅葉散。紅葉散て物と
染る冬とと御傘よ出る

哥 古今此川よおるよは流るた
山のちがいのおど今まるるし

千載一邇ふはまごまよてんし
ともはまふちとしく必川の更 頼政

連 神を月ちりひのころはまが宵柏
ちりちりははまふけのうらみ 宗碩

非 戸を叩くもふふあうまぬ紅葉路外
夜の音せめて二枚をまねはま曲巴

狂 ふしきをばらじくをの上ふて
めをてあふふしうやまはたれ 貞柳

麥時 漢土ハ秋種と下せとも
本邦十月より下して四月

黄熟は是亦早中晩の異有。
日本後紀稱徳帝大臣吉備小勅

ありて天下の百姓小大小の麥を
種しむといども其時をらしむ

て遂不成其後譬我帝弘仁十一年冬嗣公に勅ありて今より八月小蒔しとは是より時と不決といひ

非 葉をやすむる小目より一人の朔平

枯蘆

詩 二 寒蘆こよ 哥 新古今 西行

げの雪の孤彼れまはまればや かしこの枯をうゝ風わきりこ

あゝあゝたりふきりしを蘆ははの ちとばまよりらぬ芦の枝を成通

細波ここの芦をわねれてちよこの 控舟あわれふたり 二條院讃岐

詞 表の下なる芦。風きく。ちよれ声

非 ひよあれどむと人良陽の芦鬼貫 柳をわき生れらるふ波つらみ支考

狂 草も本もさうふまききぢまの 秘ぎらおのりもされ合ふたり貞木

枯柳 枯柳は文と柳は同じ心めて 柳のうれんも枯枝もよめり

哥 萬葉をわがれのをれ柳はるる

人のかつふすくりえふくらうなる

狂 ちまればまほなし芽内枯柳 柳人ひとりのてなるも 樂自

非 滝をわめてもや枯柳 五樓

落葉

諸木の葉風よりうらぐを 又木の葉れらるる

ともつら立田川よを流せせきこ びくうちりもれねもいつり

詩 落葉七字對句

風林 脫葉 山容 瘦

霜稻 登場 野色 寛

雪雲 映月 鱗々 色

霜葉 飛空 威々 聲

哥 春のこころ一葉をばはなきを山は 中しく風のまききこつに 和泉式部

①連 津青の各母ある落葉の春 智蓋
冬くまねれ 白くそめたる落葉の宗砌

②俳 一葉ちりいづもちりて月夜に嵐雪
かしの木葉の葉ふりける角も井桃戸

③狂 西風のさむい河ふの極楽をこよ
のけ落葉もよと入る天正寺 徳隆

④木葉の葉 △木葉舟 △木葉衣。木の葉
つけやうて木よあふ葉とも

⑤木葉夜ハ木の葉を衣よそそそそ
又仙人か木葉を衣とせる故事は

⑥木葉舟ハ舟と一葉といへて立秋の條
に一葉舟の故事は考合は

⑦木葉の時雨 △木葉時雨。雨のふる
ごとく木葉のちるごとく

⑧詩 風吹枯木晴天雨 白氏文集
風が枯木ヲ吹ケ晴ル空カ雨ノルヤウナ

⑨連 ちりてしる雨の木の葉の如 宗祇
客とある云ふと木葉も那 芳室

⑩狂 人ちりて木の葉を衣のまをそそ
吟と月夜のゆきをそそ 貞左

⑪朽葉 木の葉の地上に落ちてち
たるをいふまは枝よ首

⑫哥 夫木朽まれぬ朽葉も下には
まうて紅葉ふ吹やる庭の木かど 為相

⑬俳 散もせてたけなきもき朽葉は 矩州
ちるるもたうて朽葉の口惜や

⑭狂 口惜やしくて沙のまもあり 菫操
又蕪善もりの俳 嵐の寺

⑮蕪 根のあふりけるも 鬼貫
狂 ちりてしる雨の木の葉をそそ

⑯大根 △大根の如く。蕪に似て根
大之故大根といふ 蕪 蕪

⑰俳 子乙女が書とるりたり大根の野坡
干尻附のまの腕の如くは 宗維

⑱冬木の櫻 冬咲くはつらつたり

⑲冬木の櫻 冬咲くはつらつたり

⑳冬木の櫻 冬咲くはつらつたり

雪の下 花四月、鴨足、高物、まじ、葉を冬も盛、雪の一名、小よて奉、

柘の花 （園）こき、いら、もき、秘蔵、由いら、と、八、奇、葉、に、刺、有、故、り、

生類 此部より十月一ヶ月の生類をわづめ出せ

鶯子啼 （非）人の子れ、ち、く、ぬ、よ、く、ま、よ、ほ、い、る、湖中

（狂） そ、も、ハ、さ、す、が、は、花、の、四、い、ち、を、子、も、よ、さ、ち、ち、く、ふ、ち、ち、し、い、夢、井、魚

必用 此部より十月一ヶ月の生類の見や、其外必用の事との見

破	夜九ツ	夜八ツ	夜七ツ
辰	朝六ツ	朝五ツ	辰四ツ
未	辰九ツ	辰八ツ	辰七ツ
申	申六ツ	申五ツ	申四ツ
酉	酉六ツ	酉五ツ	酉四ツ
戌	戌六ツ	戌五ツ	戌四ツ

日刻 戌の日、戌の刻、亥の日、亥の刻、事と事を用ゆる事、な、く、き

出行作事 東方小向ひて、より、天道、東、より、行、月、

樂事 小春の、長、閑、ち、る、に、面、を、北、より、て、烘、き、る、日、光、に

脊を、ほ、り、し、て、暖、和、を、得、る、ハ、カ、の、負、暄、黄、綿、襖、子、昔、の、詞、も、む、じ、

瓶、酒、を、あ、く、り、獨、酌、あ、る、ハ、ハ、對、客、炉、邊、の、ま、ま、と、ぬ、風、寒、を、志、の、

ぎ、て、ハ、春、和、も、ゆ、ち、ち、ず、又、枯、枝、不、ろ、り、咲、花、の、け、い、き、づ、ら、ち、り

天氣 今月、末、より、の、西、風、半、日、も、つ、き、て、大、ま、け、ふ、ち、る、物、之、

西北の風、ハ、日、和、と、つ、さ、さ、ら、る、紫、乃、雲、う、て、バ、大、風、く、成、亥、の、日、雲、あ、れ、バ、風

生、バ、電、あ、れ、バ、大、風、あ、り、今、月、西、後、ハ、風、吹、く、と、東南、の、風、ハ、久、し、く、バ

占候 虹、あ、れ、ハ、不、作、り、て、五、穀、貴、し、初、の、ま、の、ね、に、あ、ら、れ、バ

その冬、大、小、寒、バ、十五、日、晴、る、れ、ハ、冬、大、よ、あ、さ、ら、り、申、の、日、寒、

うぐされば暴死多し。東の雲
たてばこけもひあり

養生 此月暖帽といひてく事
なれ脚を冷すべし

暈の病なり。みどり針灸と
くぐり血凝りて澀滞せし座
臥西方より向ふべし。かろ
をてしむ事をこころうらむ

衣服式 当月より綿入を暑るべし
移菊表紫黄紅葉表黄
裏青裏紅

生花式 残菊。茶花。寒葵
。隈笹。霜より五葉

。寒竹。かしま松。唐松。大山極
。つハの花。ゆつり葉

○此月紅粉の仕せり。梨みう
なくまき。香の物漬中り秘傳
どく。梔子。木芙蓉。中り種
蒔の品く其外当月用意の品
并小養生の仕せり等委し。日本
歳時記。知術全書等小出故略

十月 節終

十月飲食 並 料理献立

禁 椒と多く食へハ血脉と
物破る。ふら食へハ涕多
く出る。霜小枯るる菜と食
へハ面のいろ損じとあり

好物 今月芋と食して益あり
○雀肉冬三月これと食
へハ陽道とれこし人として
ふあしひらきり

料理 汁。あじう瓜。かき
。まらけ。せう

ほうろく。小花及び
つばき。まらけ。かハ皮
小まらけ

あいに。やまねを人。やねぶな
。きく。きく。せう
。まらけ。まらけ

清汁 きんこ。かーこ
。候松。年房
。こせう。こせう

膾 朝。せんま。きんこ。きんこ
。大らん。大らん。きんこ
。せう。せう

ふたぬ 細つら
うど ころも
本々め ころも

白う ぬらう
あし け
お ぼろ ころも

差味
かた 朝 花 ころも
あし ころも

あび ころも
本々 ころも

軒 ころも
かき 水 ころも
大 ころも

煮物
あし ころも
あし ころも

大 ころも
あし ころも
あし ころも

きん ころも
あし ころも
あし ころも

和會物
あし ころも
あし ころも

あし ころも
あし ころも
あし ころも

たこ ころも
本々 ころも

吸物
あし ころも
あし ころも

あし ころも
あし ころも

あし ころも
あし ころも

精汁
あし ころも
あし ころも

あし ころも
あし ころも

清汁
あし ころも
あし ころも

あし ころも
あし ころも

あし ころも
あし ころも

贈
あし ころも
あし ころも

くろんまきくわ
たのえんきくわ
まのいん
枕のけ
目り栗

差味
さーい
まのいん
まのいん
まのいん
まのいん
まのいん
まのいん

煮物
ほふ
ほふ
ほふ
ほふ
ほふ
ほふ

和會物
まのいん
まのいん
まのいん
まのいん
まのいん
まのいん

吸物
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ

時魚
さよう
さよう
さよう
さよう
さよう
さよう

青物
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ
あつたけ

きんかん
きんかん
きんかん
きんかん
きんかん
きんかん

防風
防風
防風
防風
防風
防風

ざんきん
ざんきん
ざんきん
ざんきん
ざんきん
ざんきん

